

日本人の足跡を訪ねて

2015 年度版

# FSM ポンペイ州 コロニアタウン 散策ツアー



この「コロニアタウン散策ツアー」は、コロニア市内に残る日本統治時代(1914~1945)の遺跡を中心に、観光サイトを紹介していきます。終戦時には1万4千人の日本人が住んでいました。全行程、約3時間を予定しています。

## I. コースの概略

9:00 スペニシュウォール前に集合

9:15 スペイン・ドイツ時代の概略説明 — ポナペ会慰霊碑 — 鳥獣慰霊碑 — コロニア公学校 — ジャーマンベルタワー — 海岸通り — ヘンリーナンペイ商会 — ナンボウ百貨店 — 田中教会 — ドイツ橋 — 海軍参謀部 — 水力発電所 — 南洋廳産業研究所 — 久邇宮皇太子植樹跡 — 南洋廳支庁官舎後 — ドイツ燃料・弾薬庫 — 国民学校門柱 — 奉安殿 — 照南神社跡 — 大橋歯科跡 — ポナペ病院跡 — ソケース集団墓地 — ドイツ人墓地 — トーチカ

12:00 ツアー終了 解散

## II. コロニアの歴史

### 1. コロニア (Kolonía) — スペイン統治以前

- ・ 1595年12月23日、スペイン、Fernandez Quiros が最初の白人として到来。その後200年余りは、来訪者はいませんでした。
- ・ 19世紀半ば過ぎに至るまで、コスラエのレロ港、ポンペイのキチ港は英米捕鯨船のあしだまりでした。11月~4月までの北西貿易風をさけるためにキチには50隻から60隻も停泊する盛況で、捕鯨船は食料、水、燃料などを求めて、島民と物々交換をはじめたのが、ポナペ島民が白人を知る始まりです。銃や酒を手に入れると共に、恐ろしい疫病も入ってきました。
- ・ ハワイの福音社は、カロリン地方を伝道域にすることを決議し、1852年9月、宣教師スタージェス、カイアウラ、医師のギュリックの3夫妻がポナペ島にやってきて、伝道を始めました。最初は苦難の連続で、8ヶ年の間に3人の信者しか得られなかったと言われています。
- ・ 1873年には7人のポナペ人伝道師を任命し、ピンゲラップやモートロック島まで伝道を開始することが出来るようになりました。

### スペイン統治時代(1886—1899) — 14年間

- ・ 1886年、スペインは、グアム、サイパンなどのマリアナ諸島、カロリン諸島(現在のミクロネシア)の領有権を宣言、支配権の確立とカトリック教の布教につとめました。
- ・ 1887年、官吏、カトリック宣教師、守備隊が着任し、ポナペ島民は正式に白人の統治下にはいりました。スペイン政府は、ポナペをサンチャゴと命名しました。当時のコロニアは現在の五分

の一ぐらいの大きさです。スペインは、島民の土地を奪い、樹木を伐採、鞭でもって強制労働を行い、賃金も支払いませんでした。

- ・ 1887年7月8日、闇夜に乗じて、200人余りがスペイン政庁を襲い、庁舎を破壊、官吏を殺害、マニラ兵70名あまりも殺害しました。
- ・ スペイン政庁は、慌てて、岩とモルタルで要塞を築きました。これが今のスパニシュオールです。海からの攻撃を防ぐために、小高い丘の上に建てられた2棟の銃器を備えた建物、政庁舎、住宅棟、病院、作業所、事務所、兵舎が、要塞内に築かれました。急襲にそなえた、溝、空間なども、用意されていました。警備なしでスペイン人が、そこから出ることは、危険でした。
- ・ 強制労働への不満や、プロテスタント信者の反発もあり、1890年5月25日再び、マララニュームの支庁を襲い、スペインの官吏13名と兵隊30人を殺し、銃器弾薬を略奪し、ポンペイ進撃の用意をはじめました。スペイン政庁は援軍を要請、マニラ総督は軍艦4隻、運送船2隻に1500人の兵隊をのせて、9月6日到着、13日にマララニュームに進撃しましたが、掃討することは出来ず、双方にらみ合いの状態が、その後、続きました。

### ドイツ統治時代(1899-1914) - 15年間

- ・ 1899年、スペインは米国との戦争に敗北し、カロリン諸島をドイツに譲渡しました。当時のお金で\$4,250,000でした。
- ・ 1899年10月13日ポナペ島民は、スペインからドイツによる統治下にはいりました。新政府は、売春宿を閉鎖し、スペイン時代に建設された要塞を解体し、市民に開放しました。病院、農業試験所も新たに建設しました。
- ・ 1901年当時、コロニアには、マレーシア41、アメリカ33、フィリピン28、ドイツ22、日本17、イギリス10、中国8、チャモロ1人の計173名の外国人がいたと記録されています。

「サンチャゴ」はドイツの統治によって、「Die Kolonie」と、名前が変わりました。



- ・ ドイツの関心の一つは、コプラ産業の育成で、コプラの人头税をかけ、それまで、それぞれの地域の最高首長ナンマルキが所有していた土地を、個人の所有にしました。また、Dawaneu川(現ACE文具の横の川)の北側をドイツの領有地[Landbesitz der Regierung]とし、スペイン時代の砦の周辺地域の開発に乗り出しました。
- ・ ドイツはポナペの16才~45才までの働ける人に1日1マルクの賃金で強制労働を課し、道路・水路・橋などの建設に従事させました。

- ・ 1905年4月20日の台風で、街はふたたび、壊滅的な被害を受けました。ドイツの資料によりますと、スペイン時代の六角形の城壁(当時は刑務所として使用)以外すべて、破壊されました。当時のお金で50万マルクの被害が出たと言われています。
- ・ 1910年10月、ソケースの有力者がドイツの強制労働に対して、これを拒否し、ムチ打ち刑に処されたのをきっかけとして、住民が蜂起する「ソケースの反乱」が起きました。
- ・ ソケースの反乱によって知事らを殺害されたドイツ側は、ドイツ東洋艦隊より巡洋艦「エムデンム」他を出動させる大掛かりな鎮圧を行いました。ソケース村民はソケース・マウンテンに砦を築いて立てこもり、ドイツ戦艦が艦砲射撃を行い、首謀者13人が処刑され、さらに、ソケースの土地はドイツ植民地政府に接收されました。
- ・ 420名余りの住民はヤップに強制移住させられ、その一部は更にパラオの鉾山の強制労働に就かされました。
- ・ 1905年の台風で、ピングラップ、モキッロ、シャプアーフィックが、1907年の台風でモートロック諸島が壊滅的な被害を受けました。そこで彼らは、1912年、ソケース島に移り住みました。

## 日本軍の進出(1914 - 1945) - 31年間

- ・ 1890年(明治23)日本人田口卯吉が91トンの帆船「天祐丸」にて、貿易品を載せて南洋(グアム・ヤップ・パラオ・ポナペ)に航海したの最初です。ポナペに数名の乗組員を残して南島商会支店を開設しました。
- ・ 1914年8月23日、第1次世界大戦で、日本は、ドイツに対して宣戦布告し、ドイツ領であった中国のチンタオを占領しました。同年10月7日、日本は4隻の艦船をポンペイ・レンゲル島に入港させ、無血占領しました。当時ポナペ島には、知事代理ケラー、警部2名、医官ギルシュナーのほか、ニューギニア兵70名が駐屯していましたが、何らの抵抗を行うことなく、陸戦隊に降伏し、島は無血裡に日本の軍政下に入ったのです。
- ・ 1920年第一次世界大戦終結後、国際連盟によって、日本の委任統治が認められ、カロリン諸島、マーシャル諸島、グアムを除くマリアナ諸島は、「日本委任統治領南洋群島」となりました。
- ・ 1922年、日本は南洋廳の本庁をパラオ諸島のコロール島に、支庁をサイパン、ヤップ、パラオ、トラック、ポナペ(現ポンペイ)、ヤルウトに置きました。
- ・ 日本の占領政策では、これまでの支配と異なり、同化政策をとりながら、当地での農業、漁業を中心とする殖産産業が推進され、日本からの移民も多数入植しました。1936年3,000人強だったのが、1945年の終戦時点では陸軍5,800人、海軍2,200人、一般市民6,000人の計14,000人を超す日本人が居住していました。これはパラオ、サイパンに次ぐ三番目の規模でした。現地の人々は5,400人ほどでしたから、如何に日本人が多かったかもわかります。

- ・ 民間統制がはじまり、人々はサカウを飲むことを禁じられ、違反したものにはムチ打ちの刑に処されました。
- ・ 1944年1月26日ポナペに向かっていた雑用船・興津丸はじめ4隻の軍団が、連合軍の艦船に沈められ、セメント6,000tはじめ、ブルドーザー5台、トラクター10台、トラック50台などが、海の藻屑となったため、滑走路の建設は、ピッケルとシャベルに頼らなければなりません。物資の補給は少なくなり、弾薬の補給にも事欠き、防衛体制も限られるようになりました。
- ・ 1944年2月10日より、連合軍はタラワ島からB 24・B 25、ウエーク島からの爆撃機による攻撃を開始、攻撃は日増しに激しくなり、2月22日まで続きました。街は炎に包まれました。空軍による空爆も2月15・16日と行われました。118tの爆弾と6,000発の焼夷弾をコロニアの街に落としました。4月までの連日の爆撃により、ポンペイ島のコロニア市街、レンゲル島の大部分を喪失しました。
- ・ この一連の攻撃で、特設監視艇を始めとする所属艦艇の大半と、地上施設、さらには弾薬等を多数喪失し、設営隊を始め、兵員にも甚大な被害を受けてしまいました。
- ・ さらに5月1日には米機動部隊がコロニアを空襲し、1時間10分に渡る艦砲射撃まで受けました。それ以後、終戦までは、たまに爆撃機が空襲に来る程度で、ポナペ島の守備隊はほとんど戦争をせずに終戦を迎えました。
- ・ 1945年8月22日をもって、ポナペ各部隊は停戦し、25日に作戦任務を解除。終戦時の歩兵第107聯隊の人員損耗表によるとポナペ島での戦死者は259名と記録されています。
- ・ 1946年までに内地に復員を完了しています。すべての日本人は帰国させられました。

#### ポンペイの日本人数

1935年	1,441人
1936年	3,017人
1937年	3,659人
1938年	4,528人
1943年	8,040人

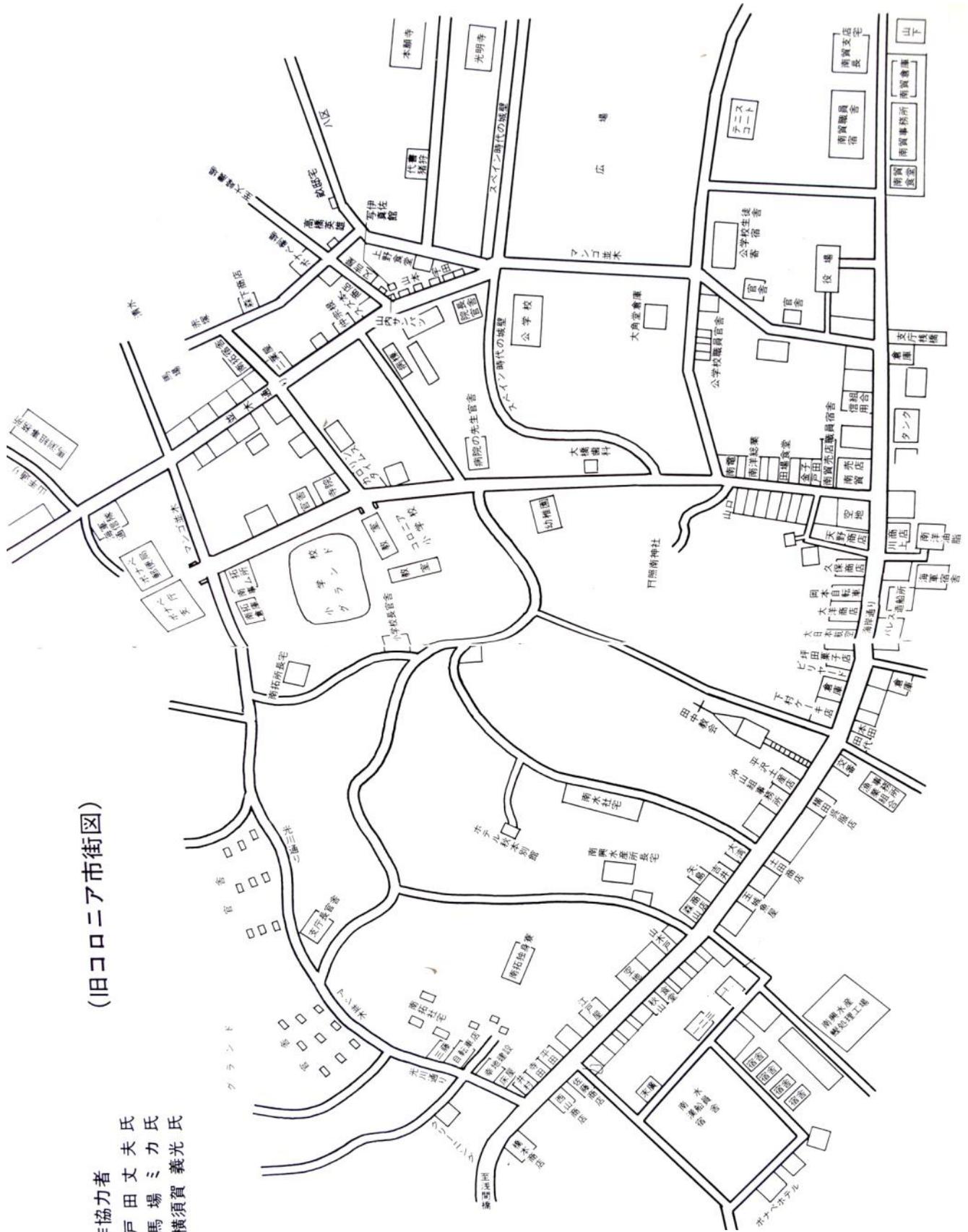
#### 終戦直後(1945年9月現在)

陸軍	5800人	ポンペイ人	5,400人
海軍	2200人		
民間日本人	6000人		
計)	14,000人		

如何に日本人が多かったのかを物語っています。

(旧コロニア市街図)

製作協力者  
 戸田 文夫 氏  
 馬場 義光 氏  
 横須賀 氏



詳しくは、折込の「実地調査マップ」を参照してください。

## 日本占領時のコロニア

- ・ 戦前のコロニアは、海軍、陸軍のための港湾設備、造船所や倉庫群が並んでいました。
- ・ なぜ、日本人がこんなに多いのかといえば、日本の南進政策にありました。  
日本がカロリン諸島(現ミクロネシア)、マリアナに進出する目的は、
  - 1) 本国からの日本人を定住させる。
  - 2) 日本国内向けの物資を生産させる。
  - 3) 今後の南進政策の出発点にする。

というものでした。

- ・ 海岸通りを行けば、病院、コプラ検査所、南洋貿易百貨店(現存)、プロテスタント(田中)教会(現存)があり、街の中心部、小高い丘の上には、病院、裁判所、現地の子供が通う公学校、日本人の子供が通う国民学校、刑務所、グランドパーク(現ソフトボール球場)、郊外には火葬場などがありました。日本人の入植で、コロニアに住んでいた地元民の多くは、街の外に追いやられました。
- ・ 街の南のはずれには、水力発電所があり、近く海岸ベリにあった海軍参謀部に送電していました。水道橋や、ダム跡が今も残っています。私有地ですので、許可をもらってから入りましょう。
- ・ 熱帯産業研究所(現存)と気象観測所がありました。
- ・ 推定で940あった建物(写真上で数えた数字)は、1944年春の空襲により10棟少々を残すのみとなり、破壊し尽くされました。
- ・ コロニア市内から北東3.25Kmのレンゲル島には、水上飛行機の格納庫、貯水タンク、地下巨大重油タンクなどが今も残っており、山上にサーチライトの残骸、砲台の跡もあります。是非一度訪ねてみてください。ポンペイ観光局に「レンゲル・アイランド 日本戦跡 アドベンチャーツアー」のパンフがありますので、ご利用ください。

## 1. スパニッシュ ウォール(Spanish wall)



1887年7月8日、(スペイン統治時代)闇夜に乗じて、200人余りがスペイン政庁を襲い、庁舎を破壊、官吏を殺害、マニラ兵70名あまりも殺害しました。スペイン政庁は、慌てて、岩とモルタルで要塞を築きました。これが今のスパニッシュウォールです。銃器を備えた建物2棟、政庁舎、住宅棟、病院、作業所、事務所、兵舎などが要塞内に築かれ、スペイン政府と植民守備隊を守る目的で、建設された城壁です。

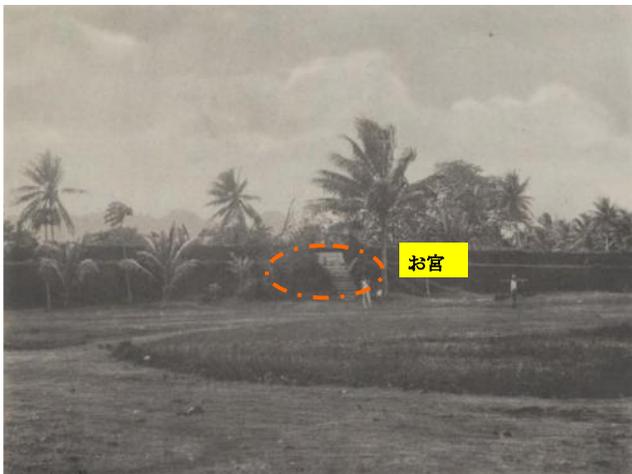
ドイツ時代には、一度は解体され、現地人の通行も可能になりましたが、1910年のソケースの乱後、再構築されました。

日本統治時代に、その多くは除去され、壁内には「お宮」とよばれる石の台がありましたが、今は取り除かれ、お宮に通じる敷石のみが残っています。ここから皇居に向かって遥拝し、「君が代」斉唱、「天皇陛下万歳」三唱などが行われたと言われています。

この要塞のなかにスペイン兵士の石棺があるはずですが、詳しい場所は、判っていません。戦後、土で覆われてしまったと思われる。

砦の周縁には堀が掘り巡らされ、西の端には木造の構造物が、海に面した場所には、二つの木造の小屋が要塞ゲート上に建てられていました。ここから海岸と海岸に至る斜面に向けて、砲撃できるようになっていました。

1975年、第2次世界大戦戦跡保存事業の一環として、スパニッシュウォールの保存が州政府によって決定。公園は日本時代「グランドパーク」と呼ばれ、公民学校(現地人の通う小学校)のグランドとして、使用していましたが、スパニッシュウォール公園と変更されました。公園中央には、さわやかな日陰をつくる大樹があったのですが、最近伐採されてしまいました。



## 2. ポナペ会慰霊碑



### 建 立 記

この慰霊像は、日本の委託統治領時代に、ポナペ島の開発と文化の向上に力を尽くして、この島で物故された人、及び先の太平洋戦争で、亡くなられた人々の冥福を祈り、再び戦争の起こらないよう、永遠の平和を祈願する為、日本ポナペ会において発起し、この島に関係のあった人々の協力と、ポナペ支庁及びコロニア町の協賛を得て造りあげたものであります。

1979年5月 日本ポナペ会  
代表 塚原 兼人  
ポナペ支庁長  
判読不明  
コロニア町長  
判読不明

## 3. 鳥獣慰霊碑



こちらは「鳥獣魚類之碑」と書かれており、ニワトリとブタのユーモラスな姿も確認できます。いわゆる供養碑のひとつでしょう。

サイモンスターの前にも同じようなコンクリートの塊があります。日本統治時代のものと推察されますが、なにかは不明です。

## 4. Kubary の記念碑礎石



### Joh Tanislaus Kubary (1846-1896)

クバリーは、ポーランド人生まれの民俗学、自然史、鳥学、動物学、言語学、博物学者で、1873年にポンペイに上陸。新種の鳥4種の発見や、島をカヌーでまわり、地図の作製にも関わりました。彼独自のプランテーションを持ち、ナン・マドールの調査にも功績を残しています。

ドイツの46名の科学者、ポーランド人科学者によって、この記念碑が建てられましたが、ペンキで悪戯されるので、現在外してあります。

元スペイン・ドイツの墓地のあったところです。

## 5. カソリック教会



この教会は1953年に完成した戦後の建築で、「Our Lady of Mercy」というのが正式名です。

寄宿舎のある女学校を併設、一時は300名の学生を抱えるほど大きくなりましたが、1977年に閉鎖され、その数年後、再び私学として開設されました。現在は男女共学です。

2009年、正式な高等学校に昇格しました。現在の体育館は、日本政府の援助によるものです。

## 6. 海岸通り



この辺りに南洋貿易の倉庫、事務所、南洋貿易の食堂がありました。



プロテスタント教会(田中教会)から見た南側の景色。道幅は今の半分ぐらいだったそうです。



プロテスタント教会前から、ヨシエ・エンタープライズの方の眺めです。



プロテスタント教会から空港方面の眺めです。



プロテスタント教会から空港方面の現在の眺めです。

## 7. コロニア公学校



小学校には国民学校と、公学校の二つがありました。1926年、コロニア、1936年、マタラニューム、1933年パリキールに国民学校が設置されました。

国民学校は、日本人生徒が、公学校には、現地ポンペイの子供たちが通いました。先生は、すべて日本人です。ポナペ人はいませんでした。

国民学校での授業は日本語で、算数、歴史(国史)、国語、修身、音楽、書道、体操、農業、工作などが教えられました。

それ以外に、神勅[神が下した言葉。特に天照大御神が天孫降臨の際に、瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)に下した三大神勅は歴代天皇が受け継ぐものとして最重要視されています]、教育勅語[明治天皇が教育に関して与えた勅語で、以後の大日本帝国において、政府の教育方針を示す文書となりました。(本文は315字)、歴代天皇の名前などが暗記させられ、暗記を出来ないものはビンタを食らわされ、帰宅させてもらえなかったといひます。

農業の授業ではグループに一定の土地が与えられ、だれが一番良いものを栽培するか競い合いました。

1年～3年生までは、8時から12時までの午前中だけ、4年～8年生までは午後1時から3時まで授業がありました。

8時から30分間、毎朝ラジオ体操、「君が代」斉唱、皇居の方を向かって1分間の黙とう(遙拝)、「天皇陛下万歳」三唱があったそうです。教室に入ってから授業が始まる前に教育勅語を読みます。

公学校は1年～3年生までのみで、1926年、コロニア、ウ、マタラニューム、キチに設置されました。

## 8. ジャーマン・ベルタワー( German Bell Tower )



建設はドイツ時代の 1,908 年に始まり、1913 年に完成。上品な半円の曲線と装飾された内壁は、太平洋地域には見られない、ヨーロッパ形式の聖堂です。

入り江をせき止めて製材工場をつくり、建築用の材木を切り、サンゴ礁を焼いて、セメント材料用石灰をとり、レンガを焼きました。偶然にも此処の泥から良質のレンガが出来ることが判り、作業場には、多くの見学者が訪れました。

布教はこの大聖堂を中心に順調に進みました。鐘楼の鐘は今も使用されています。



1921 年～ 1941 年、日本統治時代はスペインイエズス会の牧師がミサを執り行っていました。1941 年秋、教会は兵舎にするために一時日本に没収されました。

1942 年 12 月一度は返還されましたが、1943 年再び接收、1944 年米軍の空襲と艦砲射撃を受けて、鐘楼と、大聖堂の祭壇の後ろの一部(アプス)を除き破壊されました。



米軍の攻撃で破壊され、無残な姿をさらす大聖堂。

ほぼ現在の形です。

## 9. 学校坂



シーブリーズの横の道は、当時はスパニッシュウオールに長い階段で通じていたそうです。

公学校に通う子供たちは、この道を通い「学校坂」とも言われていました。

この道を少し入ったところ左側に、立派なドイツ人クラブの建物があったそうです。

## 10. ナンペイ商会(現エレンのところ)



ナーラップの船着き場を下る手前の教会のそばにヘンリー・ナンペイの銅像があるのを、ご存知でしょうか？ 裏側に、日本語で彼の生涯についての説明文があります。

ヘンリー・ナンペイは 1860 年 12 月 29 日ポナペ島キチに生まれ、1928 年 8 月 14 日、病でコロニアでなくなりました。スペイン・ドイツ・日本時代を通じて、道路や橋梁の新設、学校施設の充実など島の開発だけでなく、キリスト教指導者、実業家として名を馳せました。

とくにヤシ園の開発に力をそそぎ、ポンペイの産業開発に大きな力を注ぎました。

彼が名付け親になったお孫さんが、今もコロニアにご健在です。

銅像は日本人の手によって建てられました。



## 11. ポナペ棧橋(支庁棧橋)



大使館の横の下あたりにありました。

1945年終戦後の引き揚船は、この棧橋と海軍参謀部のドックに上陸用舟艇が来て、それに乗りレンゲル島まで行き、そこから大きな船に乗り移り、日本の浦賀に上陸しました。

アメリカ人は食料品や衣類をたくさんくれて、日本に持って帰ったら、バンバンと売れたそうです。

(聞き取り調査より)



## 12. ナンボウ百貨店

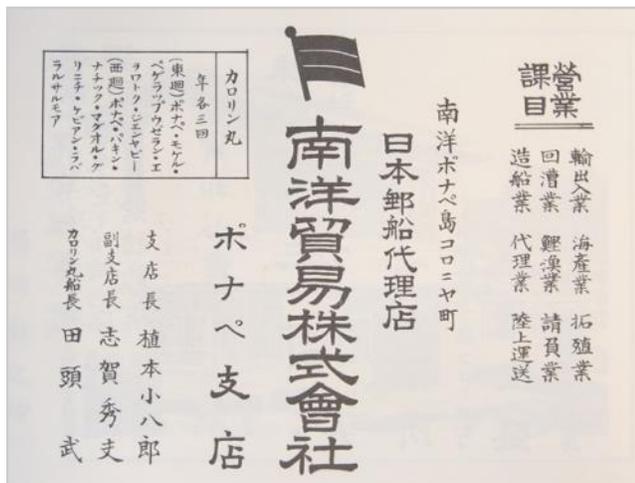


ナンボウ(南洋貿易)デパートの建物は、1944年の爆撃を逃れた数少ない現存する建物です。

百貨店の前にお人形さんが置いてあって、地元の人が、前を通る時お辞儀をしていきました。

浜側には、船に積み込み用の水のタンクがあって、少雨時に、もらい水にきたそうです。

(聞き取り調査より)



当時の南洋貿易は、輸出入業・海産業・拓殖業・回漕業・鯉漁業・請負業・造船業・代理業・地上運送と手広く営業されているのが判ります。

今はカリリンボイジャーですが、当時は「カリリン丸」で、

東行き:ポナペ・モケル・ペケラップウゼラン・エヲワトク・ジェンヤビー

西行き:ポナペ・パキン・ナチック・マグオル・グリニチ・ケビアン・ラバラルサルモア

と運航されていたことが読み取れます。

### 13. プロテスタン教会(田中教会)



1930年初頭に、日本人がお金を出して、建てられたプロテスタント教会で、戦時中は、日本軍の兵舎や倉庫に使われていました。床が200フィートほど剥がされ、防空用のシェルターが造られていたそうです。

別名「田中教会」と言います。

### 14. 花柳街



YOSHIE Enterprise の横を入ったところに朝鮮人経営の「一二三旅館」、現在のレンタカー屋のあたりに「海月旅館」、その向かい、道を隔てたところに「風月旅館」と3軒の女郎屋さん(今でいう風俗)がありました。「一カ」という旅館もありました。

その先のコロニア棧橋のところには、造船所があったそうです。高級ホテルとしては「コロニアホテル」がありました。

(聞き取り調査より)

## 15. コロニア棧橋



「トリュウバリュー」の浜側にあるコロニア棧橋です。地元の人によれば、このあたりは、石鹼工場、鯉節の工場があったそうです。

この辺りには、造船所や倉庫もありました。

## 16. ドイツ橋



エース・ステーションの手前の川が、タワヌ (Tawannu) といい、この橋を超えると、コロニアからネットになります。

現在の橋から約 6 m 離れて、もう一本の橋が架かっています。ドイツ時代にかけてられたもので、その橋の両側に下水用のパイプが通っています。この橋のメンテナンスは、日本時代も行われていたそうです。また、人によってはドイツではなくて、スペイン時代にすでにあったとも言われています。

現在の橋は、当時、「不動橋」と言いました。

## 17. 戦車群



### 九五式軽戦車(ハ)号

エースハードウェアの奥、柵で囲まれた中に戦車が並んでいます。これらの戦車は、1935年にデザインされ、36年～43年までに日本主力戦車(三菱製)としては、最多の2378輛が生産されました。37 mm砲と2丁の機関銃を装備し、NIGATA 製の6気筒エンジンを搭載しています。総重量は7.4トン、時速40 km/Hで走行可能でした。

程度の良い戦車に自動車のエンジンを装着した戦車が倉庫のなかに保存されていると言われていますが、まだ見たことはありません。

## 18. 海軍参謀部と棧橋(Dock)



エースハードウェアの店、向かって右奥に入ると、網で囲まれた私有地があります。この奥に海軍の参謀部と、棧橋、神社、国旗掲揚棒がありました。一対の狛犬がいたそうです。

オーナーの許可をいただいて入ります。

内部は、当時とはおおきくかわっており、参謀本部や神社は無くなり、掲揚棒も見つかりませんでした。

1943年～44年にかけて11棟の建物があったそうです。

日本海軍の参謀部は、終戦後アメリカ海軍本部として使用していました。現在はブルドーザーで整地され、跡形もありません。そのあたりは、戦時中の残骸のゴミ捨て場と化していました。このゴミ置き場にはまだまだ沢山の「宝物」が眠っているそうです。



この棧橋は、アメリカ軍の物資の陸揚げ、日本人引き揚げ者の乗船に使われました。

137メートルの棧橋には、日本時代の狭軌のレールが、今も残っており、此処からコプラはじめ物資を積みだしました。



棧橋の片側には、給水用のコンクリート管が敷設されていて、その一部が今も残っています。棧橋の幅は4mで、何ブロックにも分かれて建設されており、大きな波がきても、一度に全部が横倒しにならない設計がなされているそうです。

このあたりは現在も「ヤシリン(椰子林)」といわれ、当時は椰子が沢山植わっていたそうです。

## 19. 水力発電所



ヤシリン(椰子林)にある海軍参謀部一帯の電力を供給していました。

ダム幅は、15.85mあり、人口の水路橋を  
通って、発電機まで流れます。

発電機のあった建物自体は、一時博物館として、  
使用されていましたが、今はありません。

ここも私有地ですので、見学には許可が必要です。



これとは別に、州立病院に行く手前の三叉路  
から4.6km上流にナンピル(Nanipil)発電所  
があります。現在も補助的に使われている  
そうです。

## 20. 第2グラウンド



## 21. 南洋廳産業研究所&気象観測所



1920年代初め、南洋廳はパラオに続き、ポナペに熱帯産業研究所の開設を計画、ドイツ時代のようにコロニアの街中ではなく、町はずれDawaneu側の北岸に適地を見つけました。

将来的なコロニア発展を視野にいた場所を選びました。そこは海岸線からなだらかな丘に連なり、蔬菜栽培に適する乾いた土地と稲作づくりに適した湿地があり、試験場に最適の土地でした。

現在残っているコンクリート製の3階建(一部4階)でビルディングは、1927年から28年にかけて建設され、28年10月28日に開設式が行われました。



なぜ、コンクリート造りで3階建て？なぜ気象観測所を併設したかは、未だにわかっていません。当時、ポンペイで一番高い建物でした。

農業試験場には、世界中から野菜・果物が集められ、1934年ここを訪れたアメリカ人旅行者によれば、「ここは移民してきた野菜と果物の世界大会のようで、中国からはライチ、トウモロコシはカンサス、チェスナッツはポリネシア、アロエはアフリカ、グースベリー、胡椒、バニラ、シナモンはジャワからなどなど、食用・薬用などの238種類もがそだてられている。」と。



此処では、水稻の品種改良に力を注ぎ、日本から台湾種など250種の種もみを持ち込み改良に改良を重ね、1941年、日本人の口に合う品種「158 x 158」の育種に成功、春來村(現パリキール)で300町歩(300ha)に作付しましたが、労働力不足、肥料不足などで、うまくいかず、サツマイモやキャッサバに一部切り替えられました。



この建物のすぐ横に久邇宮皇太子殿下お手植の樹が、ありましたが、今は、無くなっています。

皇太子の来訪時には、子供たちは日本国旗を持って歓迎したそうです。

この試験所は資料によって、いろいろと異なる名称がついています。たとえば、「南洋廳産業研究所」、「ポンペイ民政署附属試験農園」「ポナペ農業試験所」、「南洋廳産業試験場ポナペ分場」と言うのが当時の文献にか書かれている正式名称の様です。

地元の人の間では、は「フゾク(付属)」とか、「ブンジョウ(分場)」と呼んでいました。



この建物は「現ポンペイ州観光局で、建物が崩壊寸前で、街中の他の事務所に間借り中」です。この黄色い建物の裏に、香辛料ナツメグの樹やコーヒーの木があります。やぶ蚊がおおいので注意してください。

この広大な植物園の敷地に、テニスコート・スイミングプールと一体となった「マイクロネシアビレッジ」として、会議場・スポーツ施設をともなうコンベンションセンター建設の青写真がすでにあります。早く予算がついて実現してほしいものです。

## 2.2. 支廳長官宿舎



ポナペ支庁長の官舎でした。現在の工事が始まる前には、まだ門が残っていたそうです。

星野森太郎(農業試験場の所長)さんの官舎もありました。

### 23. ドイツ燃料・弾薬壕



COMポンペイキャンパスの北西の土手に、ドイツ時代に掘られたアーチ形の燃料庫と弾薬壕があります。

弾薬壕は、外部からの攻撃に耐えるため、煉瓦とコンクリートでつくられ、鉄製の頑丈な扉が、つけられています。施錠されており、許可なく中に入ることはできません。



これは防空壕で、奥行きは120mほどあります。

日本が統治するようになって、弾薬庫、防空壕として、使用されました。

### 24. 門柱



この門柱、片一方だけですが、南洋廳・ポナペ支庁の入り口の門柱と思われます。

1922年南洋廳の本庁が南洋群島パラオ諸島のコロールにおかれ、その下に6つの支庁が置かれました。

サイパン支庁(サイパン島、テニアン島、ロタ島)、ヤップ支庁(ヤップ島)、パラオ支庁(バベルダオブ島、アンガウル島)、トラック支庁(春島、夏島、水曜島)、ポナペ支庁(ポナペ島、コスラエ島)、ヤルート支庁(ヤルート島)

## 25. 南洋廳ポナペ国民学校門柱



ポナペ国民学校の建物は 1944 年 3 月 6 日以前の連合軍の空爆により、破壊されましたが、校門の階段と門柱が今も残っています。

この一帯を「サークル」と言い、今もそう呼ばれています。

1960 年代はアメリカ政府関係者の建物 9 軒あったと記録に残っています。

門に向かって手前の右角に「法院」があり、左角に「カロリタイムス」がありました。



以前は写真のように「南洋廳ポナペ国民学校跡」の木製看板がかかていましたが、悪戯をされるので、外してあるそうです。

## 26. 国民学校テニスコート



このテニスコートは、国民学校の教職の人がテニスを楽しんだコートといわれ、現在に至っています。

## 27. 宮の内通りの街路樹 (タマリンドウ)



宮の内通り(現在のイボンヌ前の通り)は砂利道で、「タマリンドウ」の並木が植わっていました。

「タマリンドウ」は、当時の国民学校の前、現在のタウン警察(免許書の申請など行う)のところに大木が2本残っています。

マメ科の常緑高木で、熱帯アフリカ、インドが原産で、街路樹として熱帯各地に植えられています。幹は高さ25m, 直径1～1.5mにもなり、葉は偶数で長さ10～15cm。4～5月頃、淡黄色の花をつけます。

実は食用になります。

並木通りは名前の通り並木が植わっていたようですが、「ハイビスカス」だったそうです。



## 28. 打ち込み接ぎの石垣



国民学校前のタウン警察の石垣は、日本人の手による「打ち込み接ぎ」と言われる石組みで、近代城郭の石垣と同じ手法です。

## 29. 奉安殿



戦前の日本で、天皇と皇后の写真(御真影)と教育勅語を納めていた建物で、従来は学校校舎内に設置されていましたが、火事の場合、共に焼失して、校長が責任を取り、命を落とすようなケースが頻発し、校舎外のコンクリート製の建物で独立して建てられるようになりました。

天長節、新年などの祝賀祝典には、職員生徒全員が御真影に対して、最敬礼を捧げ、教育勅語の奉読が求められました。また、登下校の際にも、前を通過時は、服装をただしてから最敬礼するように定められていたそうです。

ポンペイ在住の終戦時 18 歳の方は、いまでも教育勅語を誦んじておられました。

## 30. 照南神社



当時コロニアには、3つの神社がありました。この照南神社、国民学校裏サークルにある奉安殿、そしてヤシリンの海軍参謀部に一社ありました。

## 31. 大橋歯科



いまのイボンヌホテルのところに大橋歯科がありました。この前の通りは「宮の下通」と言い、タマリンドウの並木が植わっていました。

少し上がり照南神社を過ぎたところから「照南通」と呼ばれていました。

### 32. ポナペ醫院



現在の電話局のアンテナのあるところに「ポナペ病院」がありました。建物はドイツ時代に建てられ、そのあとに日本が使用しました。

### 33. 当時の広告

南洋ポナペ島コロニヤ町  
土人工藝品  
椰子簾笠銘銀  
南洋繪ハカキ  
南洋土産  
熱帯動物剥製  
各種ステッキ  
大堀物産店  
大堀 壽

南洋ポナペ島コロニヤ町  
木珍ノ有固島ペナボキナ類ニ界世  
ステキツテスノ(レーゴ)  
店 賣 販  
店 商 洋 太  
種各一ユキ・キツテス材島  
所作製キツテス田池

「南洋ポナペ寫真帖」の最後にある広告です。

ポナペの人は、土人と呼ばれていたのでしょうか？当時は差別用語では、無かったのでしょうか？

当時のお土産は、絵葉書、木工細工と現在と変わりませんが、動物剥製は籠甲だったのでしょうか？

「世界二類ナキポナペ島固有の珍木」とは何だったのでしょうかね。

玉突きがあつたのが想像できます。

### 34. ソケース集團墓地



### “ソケースの乱”とは？（説明文訳）

#### Part1

ポンペイは不幸せなことに他国に支配されました。最初はスペイン、そしてドイツ、日本、アメリカに。支配は、1986年独立するまで約100年続きました。

何年も前、平和なポナペ人たちは、自分たちの自由と尊厳を守るためにドイツ人と闘いました。その中でも有名なのが1910年ドイツの暴政と闘った事件「ソケースの反乱」です。この歴史に興味を持ち、ポンペイ人の誇りと勇気を理解していただければ、うれしいです。

コモンライト岬には、ジョマタオを含む13人が埋められています。

彼らは、ドイツの暴政に立ち上がりました。

彼らが眠る小さな墓は、草に覆われています。彼らに思いを馳せるとき、深い嘆きと悲しみにおそわれます。彼らはポンペイを守るために立ち上がり、母国ポンペイの未来のために闘いました。

## Part2

お話しは、到る所にココナツの木が植わっていた当時のポンペイの時代に遡ります。ココナツは、ポンペイの人たちの生活に欠かせないものです。人々は子供が生まれると子供のためにココナツを植えます。ココナツと共に育ちます。ココナツは一月に1枚の葉をおとして成長し、たちまち実をつけるようになります。年がら年中ほぼ同じような気候なので、此処ではココナツの年を数える必要がありません。花が咲くようになれば、10歳です。人間とココナツは同じように暮らしています。

ポンペイでは、ココナツが初めて花をつけるのを、女性が初潮を迎えることにたとえます。ココナツが実をつけると、女性に子供が生まれます。お母さんに十分な母乳が出ない時は、ココナツを取ってきて、ココナツミルクを与えます。男性も女性も齢を取るのと同様にココナツの木も年老います。ですから、ポンペイ人は、ココナツを人間のよう世話をし、扱います。

スペイン支配のあとのドイツは法律を制定し、金儲けを優先して、ポンペイの人たちをこき使い、ココナツを植えさせ、コブラをドイツに納めさせました。ドイツは第1次世界大戦の準備のために、爆薬をつくる材料のニトログリセリンが欲しかったのです。世界中の国で、ニトログリセリンの原料になるココナツを集めさせました。

## Part3

1909年6月、ソケースとコロニアを繋ぐ道路工事現場で悲劇は起こりました。道路工事はドイツが取り仕切っていました。ドイツ人現場監督が、ココナツを切る様に命令しています。一人の男がココナツの木を切らないように嘆願しています。「これは私のココナツです。お願いだから、切らないでください！」監督は、無視しました。男は手斧をとりあげ、ココナツの根元に思いきり打ち下ろしました。根っこから血が噴き出すように樹液がほとばしりました。次の瞬間、労働者は、現場監督の男に飛びかかり、激しい格闘が始まりました。監督は労働者の隙を見て斧をとりあげ、労働者の額に切りつけました。労働者は崩れ落ち、頭から血がながれでています。それを見た仲間は彼に駆け寄り、ドイツ人を押し倒し、踏みつけ、戦いは雨と涙と血で狂気の渦と化しました。戦いは数分で終わり、道路には二人の体が横たわっていました。

## Part4

この事件の報告を受けたドイツ司令官ベーダーは、ほくそ笑みしました。彼は、たくらみを隠しながら、ソケースのチーフのジョマタオを呼び出し、殺害した罰として7トンのコブラ(注:ヤシの実の中の白い部分)を持ってくるように命じました。ジョマタオは驚きましたが、何とか自分たちで集めてきて、司令官に、要求は正当かもしれないが、これではポンペイの人は死んでしまうと話しました。ドイツ人は怒って「そんな馬鹿な事を言うな」、ポンペイ人をドイツ人とコブラを持ってこい。」ジョマタオは、返す言葉がありません。司令官はさらに続けて「おまえに7トンのコブラを集めることが出来ないはずがない。おまえはソケースのチーフであると同時にポンペイ島のチーフだろう」ジョマタオは、もう一度考え直してくれるように嘆願しましたが、彼は聞く耳を持ちませんでした。

## Part5

ジョマタオは、司令官の要求を受け入れる以外に手はありませんでした。これを拒否することは、彼を無視する事です。ジョマタオは、仲間に思いをはせ、ドイツ軍と比べてみました。ドイツ軍は強力な兵器を持っています。もし、彼らと闘えば、多くの仲間が死ぬことは、目に見えています。ポンペイが滅びてしまうかもしれないと思いました。7トンのコブラと言えば、とてもソケースだけで集めきれものではありません。彼は、彼の弟ラパリエレンに、キチ、マタラニューム、ネット、ウのチーフをたずねて、それぞれのチーフから協力が得られないか聞いてもらいました。最初の村キチでは、チーフ・パウルは、既にこの事態の償いに、7トンのコブラを差し出さねばならないことを知っていました。ポンペイでは、ニュースは口から口へとすぐに伝わります。チーフ・パウルは、ジョマタオが神経質になって、助けを求めてきたことをよく理解していました。彼は、ジョマタオの問題はポンペイ人、みんなの問題と理解しようとしていました。彼は、ジョマタオに共感をいただき、ドイツを非難しました。ジョマタオは、彼の思慮深さに感謝しました。最後に彼は、きつい口調でジョマタオにこう告げました。「おまえはココナツを守る責任がある。ところで、どうしてドイツ人の言うことに従わねばならないのだ？ どうしてドイツ人と一緒に働きたのだ？」

ジョマタオは言いました。「覚えているかい、おれたちはブレッドフルーツの村をドイツから守らねばならないことを。2年前ドイツ領事は、我々、島の者は、食べ物有り余るので、働かない、なまけものだといった。彼は、それを島民に納得させるために島中のブレッドフルーツを切ろうとした。その結果、戦いで多くの死傷者をだした。ブレッドフルーツは、たとえ一本でも絶対に切ってはだめだ。」チーフ・パウロは続けて、「ブレッドフルーツは大事な生活の一部だ、しかし、ココナツはさらに生活に欠かせない。ココナツを守るために闘おう」

#### Part6

ジョマタオとラパリエレンは、チーフ・パウロの助けを得ることが出来て、勇気がわいてきました。ジョマタオは、マタラニュームとネットを訪れて、相談した後、今度は、ウに行くのと、チーフ・ウイリアムは彼を非難して、「おれはお前の申し入れに反対だ。おれは一個たりともやらない。もしココナツを渡すと、ドイツはおれたちから、何もかも奪うだろう」ジョマタオは、返す言葉がありませんでした。彼の言うことが正しかったからです。ジョマタオは、ココナツはソケースだけで集めて、足らずは他所の村から借り入れなければならないだろうと思いました。

彼は、その年の8月までには7トンのココナツは何とか集められるだろうと思いました。もちろん、他所の村から借り入れられればですが…。ソケースの村人たちは、借りたココナツを、他の村人たちに、これから返していかなければなりません。

ジョマタオは頭に描きました。「今からもうココナツは食べられないし、Uhpwも飲めない。ココナツが熟して落ちたら、ドイツ人に届けなくてはならない。」ココナツオイルのランプが無いので、夜は真っ暗です。蚊よけに肌に塗るココナツオイルもなければ、赤ん坊に塗るオイルもありません。「私たちはドイツの現場監督を殺したけれども、懲罰はきつすぎるし、しかも不公平だ」こんなバカバカしいことを考えるたびに、怒りがこみ上げてきました。どうしてポンペイ人とドイツ人の値打ちにこんなに大きな違いがあるのだろう。彼はキチのチーフの「ココナツを守ることが、ポンペイの人を守る事だ」という言葉を思い返しました。

#### Part7

司令官はジョマタオを領事館に呼び出し、「ココナツを集めたご褒美に、おまえに表彰状をやろう」と言いました。ジョマタオは「これは村の者が集めさせられたのだから、村人にやって下さいと怒って言いました。司令官補佐は、おまえが自分でやれ。「村のものはみな、おまえたちが7トンのココナツを取って来いと命令して以来、おまえたちドイツ人を嫌っている。おまえたちが、村に近づくと危険だぞ！」。「この訪問が危険なはずなんかあろうものか、なぜなら、私は村に行って、村人たちがジョマタオの言うことをよく聞くように、この賞状をわたすのだ。」司令官は、村人を全く信用していなかったが、ジョマタオに対しては、信頼していました。そうして、司令官が数名の部下を伴って村に行くことが決まりました。

ジョマタオが村に帰ると、弟のラパリエレンや村の長老たちは、彼が賞状を受けることにたいして非難しました。「もし表彰状など受け取ったら、村の者たちは、おれたちに向かってなんと言う？」村人たちは、「ジョマタオ、おまえひとりだけが一生懸命働いて、他の人はそうではなかった。きっとそう言うに違いない。もしこの表彰状を破れば、われわれ村人の間に、連帯がうまれる。」彼は、それ以上言う必要はありませんでした。ジョマタオもまったく同じように感じていたからです。

他の村人たちのように、ジョマタオにも、7トンのココナツを集めるための悲壮な生活が待っていました。ジョマタオは心配で、夜、時々目が覚めます。彼はすぐにラパリエレンや村の長老に、自分の考えを伝えました。「表彰状を受け取ったら、その時が司令官に襲い掛かるチャンスだ。そしてドイツ人をここから追い払う。」彼らは、一度でジョマタオの考えを理解しました。リーダーたちは夜を徹して作戦を練りました。ジョマタオは、この戦いは正しいのか、それとも間違っているのか悩みました。

#### Part8

1909年10月20日 村人たちの出陣の日がやってきました。司令官と部下数名が村人たちの用意したカヌーにのって、ソケース島の棧橋にやってきました。長老たちは一列に並んで、彼らの訪問を歓迎し、海辺近くの平地では、歓迎の催しが始まりました。村人たちは、すでにたくさん集まり、テーブルには、手をかけた料理をならべて、手厚くもてなしています。セレモニーが始まりました。最初に司令官が表彰状を読み上げます。誰一人として、彼のステートメントが判るものはいません。それはドイツ語だからです。ジョマタオは、村の代表として、表彰状を受け取りました。式が終わるや否や、待ち受けていた20名の若者が活躍する番です。この日は、皮膚にココナツオイルを塗り、普段より一層厚いメーキャップをほどこし、顔や腕には銅色の塗料で化粧をしています。彼らは勇

壮な叫び声をあげ、カヌーの櫂を充て鳴らしながら踊ります。司令官は美しい勇壮な闘いの踊りを見て大満足のようにです。

#### Part9

ダンスの宴がたけなわになったとき、ジョマタオは、すっと立ち上がり、もらった表彰状を火の中に落とししました。それが、ドイツ人に飛びかかれと言う合図だったのです。鉄砲が火を噴き、司令官の顔に命中しました。部下の者たちが銃を取る前に、若者たちは部下の者たちに銃を向けました。一瞬の出来事ですが、ドイツ人の血がより多く流れました。ダンスを踊っていた若者たちは、着替えもせずにコロニアの方に走り始めました。あるものは櫂をライフルに変え、あるものは刀を、斧をもって、水の中に飛び込みました。引き潮だったので、上手に岩を跳び越え、コロニアの方に向かいました。風のように噂は町に広まり、コロニアに事態の情報が届く前に、人々は反乱が成功したことを知りました。最初にドイツ人が火まつりにあい、多くのドイツの役人が殺されました。ドイツ人の会社は火を放たれて焼け落ち、政治犯を解放するためにカラプス抑留所が、攻撃されました。ジョマタオはドイツ司令官のそばに立ち、ポンペイの誇りと勇気の象徴であるソケースロックをながめ、「さあ、これから戦いが始まるぞ」と心に命じました。

#### Part10

ジョマタオとその仲間は、ドイツ海軍がいつ復讐にくるか、彼と他のリーダーたちは、もしドイツ軍が復讐にきたら、如何に家を守るか時間をかけて話し合いをしました。一日ごとに恐ろしさが増してきましたが、2か月もたつと緊張感も薄らいできました。多くの人々が竹で槍をつくり最悪の事態に備えました。ソケース島の山の上に見張り小屋が建てられ、港を警戒しました。何日も経過しますが、何事も起こりません。そのうち夜を徹しての見張りに疲れ、まもなく、人の配置も行われなくなりました。

島の人たちはソケースの山の上で大きな焚火をたき、敵を威嚇しました。月の出ない闇夜には突然、人の形をした酒に酔った火柱が、悪魔のように空から降りてくるように見えたそうです。悪魔が赤い炎の舌で敵をなめまわすようにも見えました。何度もそれを見た人は驚きのあまり、そこに立ちすくみました。昔、ポンペイを攻撃して、この不気味な炎をみた人は、死ぬと言われました。この火は「コモンライト岬の火」と呼ばれ、ポンペイの敵を死に至らしめると信じられていました。村人たちは、この火がドイツ人を追い散らし、それによって警戒が緩められると確信していました。

#### Part11

1910年1月13日夜明け前、ポンペイの人々は大砲の砲撃で目を覚まされました。島が一度に吹っ飛んだような大きな音でした。ドイツはコロニアとソケースの境界のところから砲撃を始めました。村人たちはショックでベッドから飛び起き、ジョマタオが直ちに現場に駆けつけてみると、そこには砲弾で空いた大きなクレーターがありました。空からは砲弾の瓦礫、泥、木端、家の残骸が降り注いでいます。コロニアには、ドイツの東洋船団の巡洋艦エムンデンと戦艦が、あたかも海軍の演習のように停泊しています。村人たちは戦艦の大砲が全て、ソケースに向けられ、絶え間なく続く砲撃が続く光景を信じられず、震え上がっています。村人たちは、かつて、そのような攻撃力を見たことはありませんでした。ジョマタオは、村人が興奮しながら、「ドイツとは闘わなかったほうが良かったわ、これではとても勝ち目なんかないわ」というのを耳にしました。ジョマタオも恐怖で足が震えました。彼は、ドイツ船団と闘わなければならないことも判っていましたし、戦いにおいて勝ち目が少ないことも判っていました。しかし、人々を説得する難しさも知っていました。森の中でドイツ軍を待ち伏せし、彼らを驚かせ、攻撃をかけ、敵を後退させねばならないと考えました。ジョマタオは自分自身に言い聞かせました「決してドイツ軍からは逃げない。ポンペイ人の誇りを見せてやる！」と。

#### Part12

1月1日、パプアの兵隊が上陸してきました。ドイツ軍団は400名のドイツ兵、海軍大隊、警察官300人、パプアの兵隊170名からなっていました。ドイツ軍は最新の兵器で武装した精鋭軍団です。ジョマタオと彼の仲間は、毒矢と弓では到底勝てないことを知っています。薪を燃やした手榴弾と旧式のライフルしかありません。女・子供・年寄りもドイツ人によって、引き離されました。ドイツ軍に逆らったものは撃ち殺されました。赤ん坊を抱えて小屋に逃げ込んだ母親は、焼け死にました。パパイヤの木にしがみついたお婆さんは、撃たれて、悲鳴を上げて死にました。ソケースは地上の地獄と化しました。人々はドイツ軍の攻撃からどう身を守るか考えも及びません。人々

はバラバラになってナンポンマル、パリキールを通過してトマラのほうに逃げました。

その後ジョマタオとその仲間はナンキオップ山に移動し、そこでドイツ軍を待ち伏せすることにしました。ナンキオップ山は後ろに断崖がそそりたつ海拔300mほどの山です。前面から以外にドイツ軍が攻め入る隙はありません。ジョマタオと仲間たちは、この山が難攻不落の要塞であることを知っていました。戦闘は熾烈を極めました。ドイツの戦士は、この高さからの攻撃を受けました。多くの命が奪われました。ドイツ軍は怒り狂い攻撃の手をさらに強めました。最初の一週間の完全な戦略を立てたにもかかわらず、一週間闘ってもドイツ軍の戦略上の位置は改善しません。戦いが好転しないため、ドイツ軍は次第に挫折感を感じるようになってきました。蒸し暑さと食糧不足で、ドイツ兵士の士気は日増しに萎えてきました。

#### Part 13

闘いはドイツとソケースに留まりませんでした。島中のひとたちが、ドイツ軍の動きをソケースの人たちに教えたりして、公然とあるいは蔭からサポートしました。ソケースの人たちの逃げ道を確保し、食料の補給を行いました。ドイツ軍司令官ポラーツンは、ポンペイの人たちのゲリラ戦術に対して勝ち目はないと考えました。夜になると兵士たちはポンペイ人の夜襲に対する恐怖で、動けなくなりました。ドイツ司令官はドイツ軍の面目を保つためには、ジョマタオを降伏させねばならないと考えました。

2月15日、司令官は部下に椰子の木とパンの木を切るように命じました。また、人々の戦意を砕くためにヤムイモ、タロイモを掘り起こすように命じました。戦いの相手は、ソケースの村人だけでなく、すべての島民を敵に回すことになっていました。司令官は全軍を動員して、2月28日までに作戦を実行し終えるように命じました。補佐官のひとりが、この計画の実行の中止を申し出ました。彼は、全島民がドイツ軍に立ち向かってきて、最後には大惨事になることを知っていたからです。司令官はどうしてジョマタオを捕獲したものか悩みました。彼は本国へのコブラの輸出が気になります。彼の考えは全ての島民に伝えられました。島民たちはドイツ軍が、持っているすべての大砲で一斉砲撃して、島が焼き尽くされないか心配しています。ポンペイの時間が停まったような沈黙に全島がつつまれました。

#### Part 14

2月16日、ウーのチーフであったウイリアムがジョマタオに替わって、全島最高位のチーフとなりました。彼は、ナンキオップ山の洞窟に潜んでいるジョマタオを訪ねました。彼は流れて足を冷やしていました。彼は負傷していました。ウイリアムは前最高位のジョマタオに敬意を払い、上座を奨めました。彼は平然と下座に座りました。二人は目を合せますが言葉はでません。隠れ家は静寂に包まれています。ジョマタオがウイリアムに、静かに語りかけました。「我々は島の現況を把握している。敵の戦略も判るし彼らの真の目も判っている。最高位のチーフがお忍びで来るのだから、あなたは、わたしを敵に引き渡したいのであろう」彼は、額の汗をぬぐいました。

外はとつぷりと暮れ、真っ暗闇です。隠れ家はもっと暗いが、だれも灯りをともそうとはしません。誰一人として静かに座ったまま動きません。二人の話に聞き耳をたてています。しばらくしてから灯りがともりました。ラパリーレンが客人にサカウを持ってきて、サカウの注がれたココナツの容器をウイリアムに差し出しました。ウイリアムは上品にそれを受け取り飲みました。しかし彼は今夜、サカウを飲んでいない時間があります。この隠れ家の持ち主は気が気ではありません。というのも、彼の所有地がドイツ軍によって焼かれるかもしれないのです。彼はサカウを今度はジョマタオに渡しました。ジョマタオは、それを掲げもちました。彼は静かに落ち着いて自分の考えをまとめようとしていました。しばらくして彼はウイリアムに向かって「みんなによろしく伝えてくれ、何をすべきか私は判っている。」彼は、ウイリアムに頭を下げました。そしてサカウを飲みました。ウイリアムはジョマタオに「ありがとう」と言い、ジョマタオの腕をしっかりとつかみました。

二人は抱き合い、人前にも関わらずお互いの友情を確かめました。死を勧めたものは、死を宣告されたものより悲痛でした。二人は同じ島に生まれ、一緒に大きく育ちましたが、いま圧制者と闘わなければならない悲劇に直面しています。この二人ほど、ポンペイを愛しているものはいません。

#### Part 15

2月18日ジョマタオとその仲間はナンキオップ山をはなれ、ドイツに引き渡されました。全員が後ろ手に縛られ、ドイツ兵士の監視のもと、コロニアに連れて行かれました。この話は口から口へと伝わり、ポンペイ中にひろまりました。島中から一目ジョマタオを見たい、ことばをかけたい、お別れを言いたいと言う人々が現われました。彼らはグループになって捕虜たちの列につづきました。

2月22日軍法会議の判決が下りました。13名に対してソケースの反乱の犯罪人として銃殺刑を言い渡しました。また、死刑は2月24日午後2時に執行すると発表されました。ドイツとの戦い勃発から2か月と6日間の戦いでした。グループの中のメニタカという名前の男、彼は少年でした。裁判官は彼の言葉を疑って何度も、何度も「お前は、本当にドイツ兵を殺したのか？」と尋ねましたが、メニタカは落ち着いた口調で「わたしは手斧でドイツ兵を殺しました。」

#### Part16

死刑執行の前日、ジョマタオはドイツとの戦いを振り返りました。彼は眠れません、そうしているうちに夜が明け、そうしているうちに時計が午後2時をつげました。犯罪人はココナツの木に縛りつけられ、それぞれの前に穴が掘られています。目隠しをされて最後の瞬間を待ちます。ドイツは7名の射撃兵を用意し、3名は立って、4名はひざをついて銃を構えています。突如雷鳴のような音がとどろきました。死刑執行を見ていた女性たちは抱き合い大声を出し叫び、泣き出しました。年老いた女が頭を地面につけて叫びました。ドイツ兵が銃をむけて、彼女らをとりにかこみました。彼らは、ただ茫然として立ちすくみ、仲間が殺されるのを止めることができませんでした。銃声が何度も何度も激しく鳴り響きました。ジョマタオは最後に撃たれました。ジョマタオはココナツの木に縛られてはいましたが、あたかもココナツの木を背負っているように見えました。彼はつぶやきました「ココナツは島の命だ。おれはココナツとこの島を敵から守った。おれたちは敵に自分たちを渡しはしなかった」

処刑を見ていた人たちは、あるものは泣き伏し、あるものは大きな叫び声をあげて抗議しました。多くの人が刑の執行された現場に集まりました。それを見た兵隊たちは、島の人たちが再び反乱を起こすのではないかと、震え上がりました。ジョマタオは大声で叫びました。「俺は絶対負けないぞ、絶対に敵に明け渡したりしないぞ」。決して屈服しない、決してあきらめないと言う彼の壮烈なメッセージは、今もポンペイに生き続けています。

銃声が鳴り響き、そして静寂が戻りました。

### 35. ドイツ人墓地



ドイツ人墓地は、日本統治時代に、日本からの移民を受け入れる土地の確保のため、スパニシュ広場から、ここに移設されました。

作業にあたった囚人によれば、15体が運ばれました。

発掘時にスペイン人の墓には触れられなかったために、その場所は、いまだに不明です。今も、どこかスパニシュ広場の中で眠っているのかもしれませんが。

### 36. トーチカ



コロニアの街の最北端の海岸際にあるトーチカです。ソケースの集団墓地の突き当りにあります。

トーチカとは航空軍事用語で、鉄筋とコンクリートで使って円形、六角形などにつくった機関銃、火砲などを備えた堅固な防御用の陣地です。

トーチカは、海岸沿いにいくつかあったようです。

### 37. 日本の警察署あと



コロニアからネッチポイントに行く手前の川を渡る手前右側には、ネットの警察署がありました。今は門柱に「ネット村集會所」と日本語で記載されています。

正面のスロープも、門柱も当時のものです。

アメリカによる空中写真 1944年2月撮影





## あとがき

2013年3月末、JICAシニアボランティアとして、ミクロネシア連邦の観光促進に赴任してはじめて、ミクロネシアが31年間の長期にわたり、日本が統治していたことを知りました。

ポンペイには日本語を話される方が、まだ幾人かお元気でいらしゃいます。ひよんなことから、そのうちの一人の方と懇意になり、いろいろとお話を聞かせていただいているうちに、コロニアの街中を毎日車を走らせながら、日本時代のことを如何に知らなかったと思い知らされ、任期を僅かを残しながら、この方たちからの聞き取り、また、研究者が残した資料などから、一般向けの簡単な「コロニアタウン散策ツアー」の冊子が出来ないかと思い立ちました。

「ソケースの乱」も、私にとっては謎でした。そこで、集団墓地に張り出してあった説明文を翻訳して、特別枠で「ソケースの乱」を掲載させていただきました。

スペイン時代、ドイツ時代、そして最も長かった日本統治時代の歴史知ることにより、ミクロネシアと日本の親善友好の一助になればと思います。

最後に、口承でいろいろとお聞かせ下さった3名の方に厚く御礼を申し上げますと共に、いつまでも、ご健康でお過ごしなられますよう、祈っております。

仲 誠 一

## 参考文献

1. ポナペ島 今西錦司編 講談社 1979年復刻版
2. 南洋ポナペ寫真帖
3. Field survey of Ponape World War II Dec.1979 Scott Russell TTPI Saipan
4. From Mesenieng to Kolonia An Archeological Survey of Historic Kolonia  
David L. Hnalon Aug.1981

監修 仲 誠一

nakaporzellan@ybb.ne.jp

元 JICA シニアボランティア 観光担当

2015年6月 作成

記載内容等に関して、間違いがあれば、上記まで  
お知らせいただければ幸いです。

